

超観察 小学校 路上化計画

-ノイズを媒介とし建築と人の関係を再構築する-

21619004  
指導教員

伊東 由莉  
宮 晶子 准教授

路上観察学                  ノイズ                  アノニマス  
多様化                          偶然性                  小学校

■研究の背景と目的

路上では様々なことが起きている。路上は誰しもが平等に接する事ができ、建物を出れば気軽に触れる事ができる。多くの人は通勤や通学、遊びなど目的地に向かうまでの途中の行程に過ぎないが、そこに少し目を向けることで、立ち止まり観察したくなるような様々な事が起きているのである。

路上観察を行う事で、観察者は漠然と目にはしていたが風景として捉えていた事を観察の対象として見る事でそのもの自体の見え方が変化する。その時に初めて自分が路上でいかに物事を見過ごしていたかを知る事になる。私はこの路上観察学に建築と人の関係を再構築するきっかけがあると考える。観察物の対象となるものは路上において目的とずれているものや画一的ではないものである事が多い。それをノイズと呼ぶ。ある機能や空間においてノイズを含めて設計を行う事で設計物と人間との間に交流が生まれる。人間が観察を超え参加をすることで顔を合わす交流ではなくモノで交流する、知り合いの誰かと繋がるのではなく私以外の誰かと繋がる。そのことをここでは超観察と定義する。その結果ノイズを見つけようとするために物の見方を変化させ、多方面から物を見ようとする行為が人間の個性の多様化に容易に対応できるようになり、ノイズのある空間をつくり出すことで建築や路上においても画一的にならず、多様性のある環境へと変わる事を目的とする。

■路上観察の考察一部分

私自身が行った路上観察においてそれぞれの場面が起こるに至る経緯の予測や、人間の行為の関わり方、またその観察物がどのような路にあるのかなどの周辺状況、その空間に存在するもののスケールを考察する。そこから、人の行為を助長するようなものの配置を行う。人の基本的な行為の「入れる」「かける」「積む」などに空間の持つ機能を合わせて設計をする。日常に用いられるエレメントで必然的に設計を行う事で、そこには作為性が消され期待されたストーリーのみが残る。



図1 路上観察学の考察の一部

■路上観察の考察一全体

超観察が起こりやすくなる条件としてその路の交通量・道幅・開口部の向きが関わってくる。それぞれの場所で私自身が観察した路上観察を分析し引用する事で路上観察を設計手法に使用する。

路上では領域が明確である事によって、秩序の存在とそこからずれたものの存在が生じる。明確である事によりその範囲での秩序が設定されており、その秩序から外れたものがノイズとなる。また、開口部が他の建物とずれる事により領域化が起き、その数が増していく。



図2 路上観察構造的分析の一部

人が多路の方にみられるものは、防犯や整頓など人からどう見られるのか関わっており、人と建築のノイズの関係が見える。また人通りが少ない方では主に建物と物のノイズが生まれている。

## ■多様化する社会における小学校

現代の社会において、ジェンダーや障がいなど多くのジャンルで様々な選択肢が増えてきている。つまり従来の考え方には、あてはまらない人が増えてきている。その様な人は集団の画一的な社会に馴染めず、あぶれてしまう。現代は多様性を認め合い、価値観を共有することのできる社会が求められている。小学校においても同様である。現在の小学校は集団主義であり、ある一定の方向に向かって教育を受ける。多様化する社会の中でその教育方法はすでに遅れていると言える。小学校は義務教育であり、発達段階の7歳から12歳に体験したことはその後の人生に大きな影響を及ぼす。子供は決められた型に収まらなると感じていても、画一的である学校の環境において声を上げる事ができない。そして個性を抑圧され同じ形になる事を強いられる。路上におけるノイズはそのような子ども達自身なのである。社会のルールという秩序から少し外れたノイズの部分を個性と捉えると路上は多様化された個性豊かな社会なのである。

## ■超観察を生む小学校を考える

1890年(明治23年)に「小学校設備準則」、1895年(明治28年)に「学校建築図説明及び設計大要」を文部科学省は発布した。教室の大きさの定型や、採光・通風面を改善するために片廊下の推奨、運動場は南方・東方を選ぶなどの学校建築の定型化をはかるものであった。現代の小学校もこの形とほぼ変わらず建てられており、約100年間基本的な変化がなく、受け継がれている事が分かる。近年ではイギリスの小学校建築に習い、オープンスクールの実施やアルコーブの設計が取り入れられているが、それだけでは解決できない問題があると考えられる。例えばいじめである。小学校では基本的に平坦な毎日を送る。そのような環境では刺激を求め、いじめが起こる。また、平均からずれている事で異質な人だと距離を置かれる場合もある。小学校での個性の多様化、空間構成、環境を問題とし路上観察学から学ぶノイズのある空間をもとにこれからの小学校を考える。

## ■敷地

横浜市は昭和40年代から昭和50年代にかけて学校施設を集中的に整備をしたために8割を超える学校が築30年を経過している。従来築40年程度で建て替えを行うも、現代では5割以上が築後40年以上経過してしまっている。現



図3 敷地と既存校舎

在は外国人の子供が増えているということもあり、児童数は増加している小学校も少なくない。本提案は建て替えを想定し、児童数や教員数また敷地は引き継ぐことにする。全校生徒数を比較し、人数また敷地が標準的な小学校を設定する。271校の中から全校生徒数の中央値550人に近似した値を取り、全校児童数にあった敷地面積である小学校を今回の敷地とする。横浜市のホームページより平成30年度市立小学校現況校種別学校数、児童数を参考とする。以上の基準を満たす建替対象小学校として本提案では横浜市都筑区の都田小学校を敷地として選定する。

## ■提案

地域にひらく小学校が推奨される世論だがそれだけではないと考える。現状の形態でありつつ、子供が閉塞感を感じず伸び伸び過ごす。画一的な学校生活ではなく、持続的に環境が変化し思ってもいなかった瞬間に新しい交流が生まれる。6学年という大事な成長過程にいる他世代との生活を存分に感じ、自らが見る側から見られる側、観察側から参加する側へと状況に応じて入れ替わる。

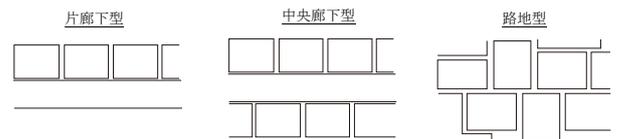


図4 教室の配置の提案



図5 路の設計

図6 建物の配置の設計

「路上」を「観察する」という誰しもが行える単純な行為から、建築やモノを媒介とする人々の交流を偶発させる。それは些細ながらも持続的に変化し続け、アクションの連続となることでノイズのある常に刺激的な空間になる。

## 【主要参考文献】

- 赤瀬川原平・藤森照信・南伸坊 路上観察学入門 筑摩書房 1993
- 上野淳 未来の学校建築教育改革を支える空間づくり 岩波書店 1999
- 四方利明 学校建築の諸相 阿吽社 2012
- E,ゴッフマン アサイラム 誠信書房 1984
- 横浜市:平成30年度市立学校現況
- <https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kosodate-kyoiku/kyoiku/toukeichosa/genkyo/h30genkyo.html> 2019/11/20